

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### 常緑系キリンソウ (*Sedum takesimense* NAKAI)

飯島健太郎 (桐蔭横浜大学工学部) iijima@cc.toin.ac.jp



タケシマキリンソウ (*Sedum takesimense*)

屋上・壁面緑化などの薄層基盤緑化用の素材として、常緑系キリンソウについて紹介したい。セダム緑化と称する薄層基盤緑化には実に多くのセダム類が導入されており、カーペット状の草姿、種類によって異なる茎葉の色合い、黄色や白色の開花景観、そして何より耐乾性に富む性質などから、厳しい環境条件下にあっても一定の演出効果をもたらしている。それらは適切な植栽基盤整備と最低限の管理があってこそ緑化状態を持続させている。

ところで薄層基盤緑化にあたって、「とにかく強健なセダムは無いだろうか?」という質問をよく受けた。その際には、筆者の栽培経験に基づいて、「厳寒、酷暑、そして過湿条件ともにキリンソウ (*S. kamtschaticum*) が強健ですので試してください」と回答してきた。しかし「キリンソウ」はことごとく却下された。その理由は、セダム類の中でも「キリンソウ」は宿根草で冬季地上部が枯れることから景観上問題があるからであった。その矢先に多肉植物の趣味家仲間から「とても強健なキリンソウの仲間」として1本の苗を譲り受けた。それは1999年6月のことであり、直ちに都内で栽培試験を開始すると同時に、同年10月より1年間日本クライメートゾーン8に相当する2地点〔神奈川県津久井郡：ZONE 8 b (年最低気温平均 $-6.7\sim-9.4^{\circ}\text{C}$ )、宮城県志田郡：ZONE 8 a (年最低気温平均 $-9.4\sim-12.2$ )〕において生育ならびに越冬性に関する実験を実施した<sup>6)</sup>。葉の距歯や古くなると茶褐色になる茎など、在来のキリンソウとは異なる草姿であり、茎が半ツル性に発達すること、そして最も注目すべきことはいずれの地点においても着葉状態で越冬することであった。その時から便宜的に趣味家仲間とともに「常緑キリンソウ」などと称していた。もちろん正式な和名ではない。国内では当時園芸的にもほとんど知られておらず筆者と数人の趣味家が栽培しているのみであったが、直ちに本種が「タケシマキリンソウ (*Sedum takesimense*)」という固有種であることが分かった。関係企業等に本種の苗の提供とともに普及を呼びかけたが、苗の出所と企業の生産活動のモラル意識からか試験的な栽培施工等に留まり、当時本種の積極的な普及は認められなかった。

さて、タケシマキリンソウは中井により命名されている<sup>3)</sup>。生息地は、日本と韓国の間の離島、UIIONG-DO (鬱陵島、旧日本名は磯竹島または竹島) とされる<sup>2,9,11)</sup>。本種は一見キリンソウの草姿を呈している。*Aizoon* (キリンソウ) 亜属に属するものの、*S. aizoon*, *S. kamtschaticum*, *S. middendorffianum*, *S. kurilense*, *S. ellacombianum* とは明らかに区別できる特徴を有している<sup>3)</sup>。*S. aizoon* のような大きなラ

イトグリーンの葉を持ち、他方 *S. kamtschaticum* の這う性質を有する。茎は太く、草丈は20 cm程度であるが後に横臥する<sup>1,8)</sup>。時間の経過に伴って、茎は木質を呈する。栽培事例に関する報文によれば、英国の栽培家では遅霜によって植物に被害が出やすいときでさえ十分に生育し、また多くの植物が休眠する冬季にほとんど被害を受けず落葉せずに維持されると報じている<sup>7)</sup>。一方、米国の栽培家は、厳寒の地 Wisconsin 州の北緯 $44^{\circ}47'$ 、西経 $91^{\circ}32'$ の地において、通常 *Aizoon* グループは毎冬落葉するが本種は冬季も着葉していることを報告している<sup>12)</sup>。栽培用土は、ピートと川砂を1:1とされているが<sup>7)</sup>、筆者らの栽培では、黒土、赤玉土、川砂、パーライト系など用土を選ばず生育した。ロックガーデン、ボーダー花壇に導入されたり、ハンギングタイプの植物としても紹介されている<sup>10)</sup>。筆者らは、根圏の限定された基盤設置型の壁面緑化においても本種が旺盛な生育を示すことなど、屋上、壁面などの薄層基盤緑化への導入可能性を実験的に検証している<sup>4,5)</sup>。

以上のような性質からタケシマキリンソウは緑化利用に極めて有望な種であり、自生地の乱獲の防止対策とともに、あらためて現栽培品の増殖と積極的な緑化利用に期待したい。

#### 引用文献

- 1) Anthony Cheung (1991): *Sedum takesimense* NAKAI translation of T.H. CHONG, Sedum Society Newsletter, No. 19, P6
- 2) Bishop Rutt (1991): Additional notes on *Sedum takesimense*, Sedum Society Newsletter, No. 19, P 7
- 3) Charles Uhl, Ray Stephenson (1991): Unique qualities of *Sedum takesimense*, Sedum Society Newsletter, No. 19, pp. 5-6
- 4) 飯島健太郎・近藤三雄 (1999): 新しい都市緑化・ガーデニング材料/多肉植物, ソフトサイエンス社
- 5) 飯島健太郎・近藤三雄 (2001): 多肉植物の生育特性を生かした壁面緑化技術, 造園技術報告集(1), pp. 58-61
- 6) 飯島健太郎 (2002): 日本クライメートゾーン8に相当する2地点におけるセダムの生育と越冬性について, ランドスケープ研究, 65(5), pp. 461-464
- 7) Jim Tuton (1991): *Sedum takesimense* - Some cultural notes, Sedum Society Newsletter, No. 19, pp. 6-7
- 8) Ray Stephenson (1991): How *Sedum takesimense* was introduced into cultivation, Sedum Society Newsletter, No. 19, P4
- 9) Ray Stephenson (1994): *Sedum Cultivated Stonecrops*, Timber Press
- 10) Sedum Society (1998): Fully hardy suggestions for hanging baskets or wall containers, Sedum Society Newsletter, No. 46, P 97
- 11) Steven W. Thompson (1996): Type locality under threat, Sedum Society Newsletter, No. 37, P 19
- 12) Steven W. Thompson (1996): Tok-do (Takeshima) home of *Sedum takesimense*, Sedum Society Newsletter, No. 38, P11



タケシマキリンソウ (*Sedum takesimense*)



生長とともに横臥する。



株径は約 10cm に達するが、日照条件によってサイズは異なる。



在来のキリンソウ (左) とタケシマキリンソウ (右)  
(2011 年 1 月撮影：神奈川県厚木市内での栽培)



ピンチすると多数のシュートを発生させる。写真下に木質化した茎が見える。